

2002 年度日本建築学会大会（北陸）
パネルディスカッション報告

社会制度と空間デザイン

—住宅と都市のランドデザインをどう構築するか—

建築計画委員会・都市計画委員会
建築経済委員会・建築法制委員会

大会1日目の8月2日9:30~12:00、突然の豪雨の中PDが開催された。司会：木内望（建築研究所）、副司会：小林秀樹（千葉大学・国総研）、記録：森永良丙（千葉大学）・中西正彦（東京工業大学）。（以降も敬称略）

■主旨／主題の説明

まず小林から「法・社会制度が個別の視点から構築される傾向にあり、全体のビジョンが希薄化しているのではないかと。専門分化の在り方と法制度の総合性を見直す学術研究に期待しつつ、多岐に渡る分野の議論の場で、部分と全体の関係を深く考えたい。」と本PDの主旨説明がなされた。

次に、田中友章（フォルムス）、山本理（長谷工総研）、中井検裕（東工大）、杉山茂一（大阪市立大学）、門内輝行（早稲田大学）、各氏からそれぞれ建築設計、市場

経済、都市計画、建築計画、研究方法の分野の立場からの主題が説明された。田中は、建物ボリュームを4段階に分け、狭小敷地から大規模な街区型までの住宅5事例をもとに設計と規制のバッティングの内実を説明。「内部と外部の規制の調停が作業の

大半となりクリエイティブなことに余り時間がかけられないことや、敷地単位の工夫の累積が良い街並みにつながらないといった問題がある」。山本は、民間ディベロッパーの状況について、良い空間に共通の尺度がないこと、民間事業の投資構造は計画性を求めていることの2つの視点から説明。投資対効果が重視される一方で、良好な環境づくりに民間の責任がない訳ではないとも。「一致するデザイン像がなければマンション紛争が起きるのは当然。また、消費者＝住み手に対する良い住空間への意識・知識の啓蒙や公的事業での役割についても考える必要がある」。中井は、都市から見た「部分」、建築から見た「全体」が手薄であると指摘した上で、地区計画などの手法はあるが現実的には集団規定に期待せざるを得ないと述べた。「部分と全体の整合性が社会制度として成り立つためには、建築家等の特定の能力のみに期待するのではなく、自治事務の確立が必要」。杉山は、阪神淡路大震災後のマンション問題が起きた2つの地区をもとに、高層マンション建設や紛争の経緯、協議会意見を住民エゴと評価するディベロッパーの態度などを述べた。「地区の全体像を考えることの不足がある、ランドデザインにはプロとしての関与が必要」。門内は、研究方法WGでまとめた過去の論文データベースをもとに建築計画研究の動向を俯瞰し、建築計画の閉塞感と期待感について説明したうえで、研究領域の設定と研究方法の重要性を指摘。「部分と全体の関係をとらえるためには『演繹』『帰納』ではない『アブダクション（仮説推論）』という推論形式が重要となる。必要なのは部分から全体へのアブダクティブな構想力。」

■討論

後半戦、赤崎弘平氏（大阪市立大）からのワンルームマンション建設反対に関する問題を一例に住民の反対意識を都市計画としてどのように考えるべきか、また森本信明氏（近畿大学）からの主旨説明中に例示された地区イメージのプロトタイプに関する質問を端緒に、討論がなされた。以下にその概要をまとめる。

【制度設計の手続きと公共性】

赤崎氏の質問に対して中井は、まず手続きが重要であるが実質的な公共性の担保とのバランスをどう取るかだろうと述べた。個人の権利調整としての参加だけではなくマスタープランや立法過程への住民参加の重要性も説く。最後は地方の議会がどのように関わっていくかが制度デザインに重要と考えるとも。山本は、建設による人口増加や経済効果について議論し明文化



小林による主題解説



パネリスト



悪天候に関わらず盛況だった会場

していく必要があるだろう、地域住民のイメージに外部から批判(例えばエゴの指摘など)できるかも大事であると言及。地域の声の総和が都

市全体からのその地域の位置づけと一致するのか議会での判断も必要、そのためにはまず発言が重要とも。杉山は、地元の抵抗の具体的内容が何なのか捉えることの必要性和、その中で住み手の顔が見えなくなっていることの問題を指摘した。

【ランドデザインの枠組みと方法】

森本氏の質問に対しては、各パネリストから様々なプロトタイプのイメージの存在とその問題の指摘を含めた回答があった。それを受け、門内が問題を提起。「ランドデザインが様々な意味で用いられているが、もっと社会性や思想を議論しないといけないのではないか。制度設計の総体、基本的な考え方を都市計画分野では議論されているのか?」。それに対して中井は、都市計画はまず生活空間を作ることに注力してきたが、ようやく本来のランドデザイン的な方向を模索しつつある、しかしまだもがいている段階とした上で、都市を部分の集積としてランドデザインは放棄するか、都市に関わることは大から小まで全部関わるか、2つの方向性が考えられると述べた。小林はランドデザインとしてプロトタイプを示すことについて、最終形イメージがわからないからプロセスが大事だとされるが曖昧になりがちなので、最終形の"イメージ"を提示すればプロセスにも役立つはずと意義づけた。さらに各パネリストからランドデザインの枠組みについて活発な発言がなされた。

各氏のまとめとして、門内は全体は部分を線形的に足したのではなくゲシュタルト的・複雑系的なものであるという認識のもと、部分と全体の交流を促す概念の発掘と、その中に市民を登場させる必要性を指摘。杉山は空間のふさわしさを住民が判断できるような地域のブランドイメージづくりの大切さについて言及する。中井は「都市を空間的に見た場合『どのまとまりを元にするか』を考えることがスタート、それが見えてくるような仕組みが作れないだろうか」。山本は単にその地域の住民だけでなく、外部も含めた発言の機会

を作ることが必要と述べた。田中は、よい住環境像は複数あるべきであり、地域特性や立地などから場所ごとに整理することを主張した。また法規制は建てるべきものは何も決めてないという側面を指摘した。

稲垣(フェリックス)の総括の後に、小林から建築計画からの社会制度に関する提言は重要だが、そのためにも部分だけでなく「全体」をさらに考えることが必要であるとのしめくりがありPDは終了した。

■まとめ

初日の午前中、多くの参加者を得たことは主題に対する関心の高さが伺われる。また制度設計や判断・対話のプロセス、ランドデザインや部分と全体を指示するイメージの、発言者の立場や視点・関心による多様性が明らかになったが、この議論に関わる主体を如何に捉えるかについても更なる議論が待たれる。